



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1798-1847年におけるロシア文学とウクライナ文学の交錯：ウクライナ・コサック表象に注目して
Author(s)	上村, 正之
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16963号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16963
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99807
Type	doctoral thesis
File Information	Masayuki_Uemura_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名： 上村 正之

主査 准教授 安達 大輔
審査委員 副査 教 授 宇山 智彦
副査 教 授 小椋 彩

学位論文題名

1798-1847年におけるロシア文学とウクライナ文学の交錯
——ウクライナ・コサック表象に注目して

・当該研究領域における本論文の研究成果

上村氏の学位論文（以下本論文）は、18世紀末から1840年代までのロシア文学・ウクライナ文学におけるコサック表象を分析するものである。近代ウクライナ文学の始まりとされる『エネイダ』が出版された1798年を出発点として、その著者コトリャレウシキーから、ルィレーエフ、プーシキン、ゴーゴリ、ベリンスキーといったロシアとウクライナの文学の関係に大きな役割を果たした人物の著作を中心に分析を進め、シェウチェンコが1847年に執筆した未刊行の「『コブザール』序文」にウクライナ・ナショナリズムの明確な発露を見て論は閉じられる。

コサック表象の先行研究は、当時のロシア帝国領内における制度的・文学的非対称性を反映してロシア文学の枠内で行われるか、あるいはコサックがウクライナの民族・国家の象徴とされてきた事実を踏まえてウクライナ文学の問題として捉えられるかのいずれかだった。本論文が独創的なのは、ロシアとウクライナという二つの文学が交錯するダイナミズムに焦点を当てている点である。コサックやロシア帝国に関する歴史的資料も参照しながら、ロシア文学・ウクライナ文学双方の描き出すコサック像を対比することで、ロシア文学との関係性においてウクライナ文学が国民文学として成立し、ウクライナの民族性・国民性が意識されてゆく、文化・社会的な交渉の過程を浮かび上がらせている。

日本ではウクライナ文学史の体系的な研究がほぼ見当たらず、本論文は日本のウクライナ文学・文化研究における画期をなす重要な研究である。主要部分はロシア文学会、ロシア・東欧学会の学会誌に査読論文として2021、2023年にそれぞれ発表済みで、本論文の価値は日本のスラブ文化研究の主要学会ですでに認められている。また『エネイダ』の上村氏による翻訳出版が決定しており、当該作品を中心的な分析対象の一つとする本論文は、ウクライナ文学・文化の普及を通じた社会貢献の点でも大きな意義を持っている。

国際的な文脈では、ウクライナ学の拠点を率いるハーバード大学のセルヒー・プロヒー教授が 2023 年度にスラブ・ユーラシア研究センターに滞在した際に指導を受け、またウクライナ研究が盛んなカナダで海外調査を行うなど、ロシア中心の文学史観からの脱却を目指す欧米の最先端のウクライナ研究の成果を取り入れている。本年 1 月に本論文の一部を基にメルボルン大学で行った英語報告は現地で高い評価を受け、論文として発表が予定されている。ロシアでも、2023 年に本論文の一部が最も権威のあるゴーゴリ学会の学会誌に査読論文として掲載された。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会では、上記のような本論文の研究成果が高く評価された。

上村氏は、修士課程までロシア文学におけるコサック表象を、ゴーゴリを中心に研究していた。ゴーゴリが現在のウクライナ出身であることからウクライナ文学研究の必要性は認識していたが、本格的にウクライナ文学の研究に着手したのは、2022 年のロシアによるウクライナ全面侵攻を承けてロシア中心の文学史観を見直す必要性を痛感してからだった。短期間でウクライナ語を習得し、ウクライナの国民文学史の幅広い知識を身に付け、本論文でその成果をウクライナ文学に関する浩瀚な一次資料・二次資料の参照と丁寧な読解に結実させているとして、傑出した行動力や問題意識、専門的知識と言語運用能力が評価された。

本論文は二つの文学・文化の関係や力学を明らかにすることで、埋もれてしまった差異としてのウクライナ人の主体性をロシア人と対照しながら掘り起こし復元するものであり、その作業の意義は高く評価された。一方で、それがロシア／ウクライナの二項対立や国民文学・文化の枠組みの固定化に見えかねないという指摘があった。これに対して上村氏からは、今後の研究方針として、サバルタン研究やポストコロニアル理論、ナショナリズム研究等の理論的な分析を深めながら、ポーランドやいわゆるウクライナ・バロックなどを研究対象に含めることで、ナショナルな枠組みに回収されない地域の多様性により目配りを行う、という回答があった。

本論文は日本語でのウクライナ文学の体系的な研究として博士論文レベルでは初となり、今後解決すべき課題が残されているのは自然である。学振特別研究員としての採用が内定するなど、国内外でウクライナ文学の専門家が不足している現状に照らし将来が嘱望される存在であり、その第一歩として、本論文は博士学位授与にふさわしいと審査委員会は全会一致で結論づけた。